

令和5年 第42回礫珉展入賞作品名・氏名及び審査講評

審査委員長 渡辺 博

中野市長賞 「美味しい!」(うまい!) 徳竹 孝之

画面いっぱいに食された鯛が描かれている。その迫力に圧倒される。画面の中心を占める白身や骨、皮、背景への質感の追求は、その成果が十分に伝わってくる、箸やレモンなどによる画面構成や背景の色彩の組み合わせなども主役を際立たせている。表現をしていく者にとって改めてその姿勢を教えてくれる作品である。

礫珉賞 「火」「風」「水」「土」(ひ かぜ みず ち) 池田 洋子

淡い色彩の中に少女を中心に様々なものがちりばめられている。それらを階段や線が繋いでいく。パステルで描いた上にアクリル絵の具をかけているが、その手法が見る側にイメージの広がりを持たせてくれる。過去から体験してきた思い出やこれからのことなどに込めたイメージの展開は奥が深い。シャガール作品を連想する。

峯樹会賞 「大 樹」(たいじゅ) 樋口 芳子

森の中にしっかり根を張り立っている樹、それは作者自身かもしれない。全体を淡い青緑色でまとめ、樹のひだやくぼみなど、まるで色鉛筆で描いたのではないかと思わせるほど見極めた表現となっている。大樹の背景にある木々の空間、所々になびく霞は、この絵の存在感、ひろがり、ドラマ性を感じさせ、その良さを引き立てている。

中野市議会議長賞 「誰も知らない街」(だれもしらないまち) 小橋 京子

この作者の持ち味を十分に発揮した素晴らしい表現となっている。この街はどこにある街なのか、背景の建物はどんなお店なのか、三角帽子の子供たちはどこへ行こうとしているのか、特に三人の子供たちの絶妙な配置、腕や足の微妙な違い、思わずドラマを描いてしまう。また、全体を赤と少し暗いグリーンでまとめた配色も見事である。

中野市教育委員会賞 「春るるる」(はるるる) 桜井 みね子

自宅の庭の一隅なのだろうか、つつじをはじめ春の草花が生き生きと描かれている。緑中心の画面に花たちの色合いの赤、黄色、白が変化を付けている。手前から奥へ広がる作者自身の意識が、表現に結実していて、見るものにその空間と存在感を十分に感じさせてくれる。

会員奨励賞 (北信ローカル賞) 「海辺にて」(うみべにて) 原 隆文

作者自身が海辺を旅した思い出を描いている。画面全体を、斜めの線を生かして、その時の想いを表現しようとしている。それは主人公の自分の姿勢や影、波打ち際の砂浜、舟でより強められている。とりわけ打ち寄せる波が丁寧に表現されていて素晴らしい。

奨励賞 (テレビ北信ケーブルビジョン賞) 「北信濃秋景」(きたしなのしゅうけい) 市川 董一郎

秋の山の陽光に照らされた情景が、見る人にしっかりと伝わってくる。特に手前の樹林の上部に陽光があたって光っている部分と、下の影の部分の対比が美しい。

奨励賞 (北信ガス賞) 「一本木公園の夕暮れ」(いっぽんぎこうえんのゆうぐれ) 小林 実

静かに暮れなずむ公園に遊ぶ子供たちの声が聞こえてきそうな作品である。切り絵を思わせるような逆光の中に立つ木々、その枝一本一本に思いを込め表現されている。縦長の画面が効果的に生かされている。